

追憶

第15期生 手束 健人

この卒業エッセイを書くにあたって、題材を探している際、非常に思い出深いものが目に入った。本文17文字目にあるこの「,」である。「小さっ!」と思われるかもしれないが、去年、この会誌の編集に少なからず関わらせていただいた際、普段使う読点とは違うこの「,」には、非常に苦しんだ思い出がある。今年会誌を担当している後輩もわかってくれることだろう。ちなみに、会誌の編集では、本文47・48文字目にある「17」のフォントである Times New Roman にも苦しんでいる。またちなみに、本文187文字目にある「・」にも、もちろん、思い出は存在する。3年春のコトラーの要約で MSP 明朝の「・」に大変苦しめられたことだ。ぱっと見で判別できる感覚なんて、当時は持ち合わせていなかった。ふと、Word の些細な文字を見るだけで、こんなにも小野ゼミでの思い出がある。

もちろん、これは Word に限った話ではない。例えば、ふらふらと町の中を歩いているだけでも、そこから中に置いてあるパンフレットを見て、「自分にデザインセンスなんてないから、使えそうな見本をかき集めてくるしかねえ!」と、入ゼミ説明会のパンフレットを作るため、無料のパンフレットを大量にかき集めた思い出や、とりのすけの看板を見て、日吉で行った個別説明会の後入った日吉のとりのすけでいろいろあって、とりのすけの店長からなぜか LINE が来た思い出などがある。長くなるため、パッと思い出したもののみを載せ、満遍なく列挙することは割愛させていただくが、さまざまな場所やものに、小野ゼミでの思い出が色濃く、それなりに存在している。

今までの人生の中で、サンプル数が大して多くはないとはいえ、様々な集団に属し、そこでの時間を過ごしてきた。しかし、これほどまで広範囲にわたって、思い出が色濃く残るような時間があつたであろうか。もちろん、今まで属した集団には基本的に深く関わってきており、思い出は十二分にある。ただ、それでも、自分の中で小野ゼミでの思い出がそれらよりもはるかに広範囲にわたり、色濃く残っているのは、小野ゼミで過ごした2年間を、自分が知らず知らずのうちに大きく感じるようになっており、何物にも代えがたい思い出となっているからであるように思う。長いようで短い、非常に密度の濃い2年間であつたが、小野ゼミでの2年間を、自分が大きく感じるようになり、その中で何物にも代えがたい思い出を得られたのは、様々な取り組みだけではなく、やはり、思い出を形作る核となる、小野ゼミで過ごした2年間で関わった素晴らしい方々の存在が大きい。同期の皆や、大学院生の皆さん、先輩方、後輩たち、そして何より、自分を最後まで見捨てず指導して下さった小野先生には、この場を借りて、心より深く、感謝の意を表したいと思う。本当に、本当に、ありがとうございました。

小野ゼミでの思い出は、今、これを苦勞しながら書いている瞬間、卒業エッセイを書き終えるまであと5行くらいしかない、というところから卒業するまで、あるいはそれ以降も、残された機会は少ないながらも、まだまだ生まれていくのだろう。それもまた、これまでと同様に、自分にとって何物にも代えがたい思い出となることは間違いないと信じ、そして、最後に「,」や Times New Roman などのチェックをしながら、このエッセイを締めくくらせていただきたいと思います。